

# 葛飾区の水防災の取組み

葛飾区副区長 赤木 登

## 1. 葛飾区の地勢

葛飾区は、東京都の東端に位置し、総面積34.8km<sup>2</sup>に約46万人（約23万世帯）の人々が暮らす住宅・人口が密集した市街地です。



葛飾区の位置

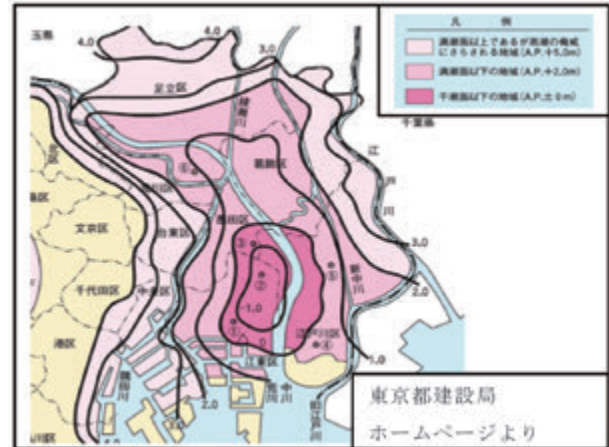
本区の地形は、北から南西に緩やかな傾斜のある平坦地で、北に大場川、東に江戸川、西に綾瀬川、荒川、また中央に中川、新中川の大小6河川が流れる沖積層の低地帯です。沖積層は、約2万年前の最後の氷河期以降に堆積した軟らかい砂や泥で形成された地層で、軟弱地盤と呼ばれ、区全域に厚く堆積しています。



本区を流れる河川

また、元来低地帯であったことに加え、明治期から昭和40年代頃まで産業の発展に伴い地下水の汲み上げ等が行われ地盤沈下が進行したことにより、満潮時には海面以下の高さとなる、いわゆる

ゼロメートル地帯が大きく広がり、全域が高潮の脅威にさらされる地域となっています。



低地帯の地盤高

## 2. 水害の歴史

低地帯が広く分布している本区では、上流域への大雨、集中豪雨の発生による河川の氾濫や、内水排除の困難による浸水等、これまでも度々、浸水被害が発生してきました。

河川の氾濫や高潮による主な大規模水害として、関東大洪水（明治43年）やカスリーン台風（昭和22年）、伊勢湾台風（昭和34年）が挙げられます。

関東大洪水は、連日の降雨により、現在の隅田川や綾瀬川の堤防が各地で決壊、越水し、多くの死傷者の発生や家屋の流出・倒壊、伝染病の流行など、多大な被害をもたらしました。



明治43年の水害（亀有駅付近）









柴又公園

葛飾区では、カスリーン台風70年を機に、今後も柴又地区の高規格堤防のような水防災と街づくりが一体となった事業に積極的に取り組んでまいります。



蛇行を繰り返す中川（七曲り）